

## マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 6

朴 希沙(Kisa Paku)

前回は、意識のスペクトラムという観点から露骨なヘイトスピーチと曖昧なマイクロ・アグレッションの関係について考察しました。今回は、マイクロ・アグレッションを乗り越えるために必要なことを、Sue(2010)の提案から考えてみたいと思います。

### ◎はじめに ～前回のふりかえり～

最近、いろいろなところでマイクロ・アグレッションに関するワークショップを開いています。「無意識的で曖昧な差別や偏見」という言葉だけを聞けば、なんとなくその

意味も分かるような気がするマイクロ・アグレッションですが、実際にその概念について説明したり議論したりしてみると、複雑で定義が難しい部分があるところに気づかされます。例えば始めのころは「単に攻撃的な言動とマイクロ・アグレッションとは何が違うのか」といった疑問を度々いただき、それに対してすっきりとした説明ができずにいました。またワークショップの目的や方向性についても迷いながら進めていたのですが、参加者の方々から率直な意見をもらい、色々な団体とコラボさせてもらう中で、その目的や意義について少しずつ明確になってきた気がします。現在は、コミュニティにおいてマイクロ・アグレッ

ションを取り扱うことから生まれる可能性に着目しています。この社会の全てのマイクロ・アグレッションをなくすことはほとんど不可能だと思いますが、少なくとも自らの属するコミュニティの中でマイクロ・アグレッションについて話しを深めていくことで、コミュニティそのものの質が変化する可能性があるのではないかと考えています。

前回は、露骨なヘイトスピーチと日常的で曖昧なマイクロ・アグレッションについて、気づきのスペクトラムという観点から考察しました。一方の極には、意図的に、悪意を持ってヘイトスピーチやヘイトクライムを行う人々がいますし、他方には無意識的なマイクロ・アグレッションが存在します。これらの言動にはもちろん程度や質の差異が存在します。しかしこの社会で暮らす私たちの誰もが偏見や差別から自由でないのだとすれば、それに対して私たちがどの程度意識的であるのか、という観点もまた必要になってくるでしょう。つまり差別か差別でないかということより、どの程度自らの立場から発せられる言動に意識的であるか、という視点です。

しかし、人は自らの社会的属性や立場に対してどの程度自覚的になれるのでしょうか。そこには際限がないような気がしますし、自らの無意識的な差別や偏見を全て意識化することは実質的にほぼ不可能だとも思います。そこで、今回は問題をやりとりの中で生じる具体的な場面に即して理解するのがよいのではないかとすることを述べました。情けないことかもしれませんが、私たちは立場が異なる具体的他者との出会いやぶつかりあいがあつて初めて、生身の

気づきを得るのかもしれませんが。

そして、そのような出会いやぶつかり合いが生じるためには、少なくともマイクロ・アグレッションについて話せる環境が必要だと思います。別の言葉で言えば、これまでいくどとなく「敏感過ぎる」「どうしてなんでもかんでも人種やジェンダーに結びつけようとするの？」と簡単に無価値化(Invalid)され、殺されてきた言葉が息を吹き返すには、マイクロ・アグレッションが生じるのとは異なる環境を整える必要があるのではないかと思います。

そこで今回は、Sue が提案するマイクロ・アグレッションを乗り越えるための原則について紹介したいと思います。

## ◎マイクロ・アグレッションを乗り越えるために ~Sue の提案~

『Microaggressions in Everyday Life』の著者である Derald Wing Sue は、マイクロ・アグレッションを乗り越えるためには従来の多文化教育だけでは不十分であることを指摘しています。無意識的に生じるマイクロ・アグレッションを乗り越えるためには、知識を得るだけでなく体験的なリアリティから学ぶことが重要になるからです。Sue はマイクロ・アグレッションを乗り越えるために必要な以下の 5 つの原則を紹介しています。

### 原則 1.人種／民族が異なる人々、女性、LGBT に関して、その集団に属する人から学ぶべし

これは、自らが抱く無意識的な偏見や差別

に関して、その前提と理解を問うためには自分たち自身だけでなく、マイノリティグループに属する人々から学び、検討することが大切であることを意味しています。立場が異なる人々に出会い、学んでいく過程でこそ自らの前提や理解が変化していくからだと思います。

### 原則 2.マイノリティグループに属する、健康で強い人々から学ぶべし

これは、私たちが普段他のグループに関する情報をマスメディアや（主流文化の視点から書かれた）教科書、親戚や友達や近所の人たちが言っていることを通して得ていることと関係しています。しかし例えばマスメディアにおけるマイノリティグループに関する描写が正確であるとは限りません。Sue はテレビにおいて、黒人は犯罪者、女性は家にいるもの、LGBT は病的なものとして描かれがちだと述べています。逆に言えば、私たちは強く、健康的なマイノリティの人々と出会う機会に相対的に恵まれていません。そのため、強く健康なマイノリティの人々と出会うことを通して、私たちのバイアスがかかった見方を相殺する必要があります。

### 原則 3.経験的リアリティから学ぶべし

これは、自らと異なる社会的属性をもつ人々に関する理解は、私たちが理解したいと願う人々の経験から与えられなくてはならないことを示しています。その人々が日常的にどのような経験をし、どのようなリアリティの中で生きているかを具体的に知る必要があるということです。在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人

のためだとしても（してもの会）」では、特にこの経験的リアリティを共有し、エンパワーしていくことに重点をおいていました（詳しい話はまた次号で!）。

### 原則 4.バイアスと恐怖に対する継続的な警戒心から学ぶべし

Sue はおそらくこれが最も難しいことだといいます。私たちは、自らの無意識的な偏見や差別が表に出てくると、強烈な不安や罪悪感、防衛心を感じるからです。そのため、自らが抱く偏見に対して探求することが難しくなります。しかし、その即時的な反応を乗り越えて、自分は誰かに偏見を向けてしまったりそれに基づいた行動をしてしまったりする可能性のある存在であることを受け入れ、自分が傷つけてしまったかもしれない誰かとオープンなコミュニケーションを続けることができれば、私たちは自分自身に対して正直になってゆく旅を歩み始める事ができます。そしてそれは結果的に、私たち自身や私たちの友人にポジティブな変化を起こすというのです。

### 原則 5.レイシズム・セクシズム・ヘテロセクシズムに対抗する個人的行動に参加することから学ぶべし

これは、家庭や職場、コミュニティといった日々の生活の中にある差別と偏見に対して直接的な行動を行うことを意味しています。マイクロ・アグレッションは、個人の間で生じるもののように見えますが、実際には私たちの社会の不平等なシステムの現れだと言えます。だからこそ、私たちは個人的なレベルだけでなく、システムティックな行動を通してこの暴力について訴えて

いく必要があります。以前、マイクロ・アグレッションに関するワークショップを行った際、参加者の方から「私は本当に偏見など抱いていないのです。ですが『私は偏見など持っていないよ』と伝えたらマイクロ・アグレッションになる。だとすれば、どうやって自分が本当に偏見を持っていないことを伝えたらいいんですか？」と質問されました。その答えは、まさにここにあると思います。自らが偏見を持っていないことをマイノリティ集団に属する誰かに言葉で説明し納得してもらうよりも、この社会にあふれるレイシズム・セクシズム・ヘテロセクシズムに対して日常的な場面で対抗することの方が有効だからです。

以上、今回は Sue が提案するマイクロ・アグレッションを乗り越えるために重要になる実践について紹介しました。参考になったでしょうか？次回以降は、「してもの会」での活動とそこから得られたマイクロ・アグレッションを乗り換える対話に関して述べていきたいと思います。

#### 【参考文献】

Sue, D.W.(2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.